

書 評 と 紹 介

ロイドン・ハリスン著／大前 眞訳
『ウエップ夫妻の生涯と時代
——1858～1905年：生誕から
協同事業の形成まで』

評者：都築忠七

ウエップ夫妻（ビアトリス・ウエップ、1858-1943； シドニー・ジェームズ・ウエップ、1859-1947年）の生涯をひとつの伝記にまとめたロイドン・ハリスンの未完の大作である。独立の書物の体裁をとってはいるが、ロイドンが彼自身の生涯をかけた包括的ウエップ伝の、そして彼の描くイギリス近現代史の、最初の巻だとみなすのが適当だろう。しかも以下に見るようにウエップの公的伝記である。

ロイドン・ハリスン（Royden Harrison）がウエップ伝を書くようになった経緯は序文に詳しい。彼の協力者ジョン・ハルステッド氏から筆者が得た詳細などを参考にして、その経緯を再構成してみよう。本書「後日譚」でも一部分言及されているが、第一次大戦末期、シドニーは労働党党首アーサー・ヘンダーソンに協力して党の新綱領（「悪名高い」社会主義的な第四綱領はのちにブレアのニューレイバーによって削除される）および画期的な政策提言「労働と新社会秩序」を作成し、戦後は石炭国有化を支持したサンキー石炭産業調査委員会の労働側

委員として活躍した。1922年の総選挙で炭坑夫の多いダーラムの選挙区で立候補し、圧勝。ラムゼー・マクドナルドの第一次労働党内閣には商務相として入閣、1926年のゼネストでは労働運動と距離をおき、以後ダーラムの選挙区での立候補を断念。第二次労働党内閣組閣にあたり、パスフィールド男爵として上院議員となり、植民地相として入閣。この爵位名は1923年ごろ夫妻が入手したハンプシャーにある邸宅の地名パスフィールド・コーナーに由来する。ウエップ夫妻が晩年設立した財団もパスフィールド財団と呼ばれ、これがロイドンの序文冒頭に登場する。シドニー死亡時の遺産評価額は59,419ポンド、財団の主要な基金となる。フェビアン協会、L. S. E.、社会調査目的などに用いられることとなり、ウエップ夫妻の伝記の執筆者の選定も財団の仕事になった。

財団が最初に依頼したのはR.H. トーニーだった。トーニーはヘンリー・ペリングの協力を得ながら準備にとりかかった。その間、財団理事のひとりマーガレット・コールが独自にウエップ伝を手がけ、しかもそのタイトルにトーニーが1945年のウエップ記念講演に用いた題名と同じ「ウエップ夫妻とその業績」を選んだことに彼は当惑し、執筆を辞退したようである。実際、マーガレットは、シドニーの死亡直後、この題名の論文集を編集出版（1949年）しているが、執筆者のなかにトーニーの名前はない。その間、ウエップ伝をめぐってマルカム・マガリッジやノーマン・マッケンジーの影がちらつく。ロイドンがウエップ夫妻の伝記を書くようパスフィールド財団から正式に委任された時日は、今のところ確定できないが、ロイドン自身は1960年代中頃だとしている。

1965年ロイドン・ハリスンは、彼の処女作『社会主義者以前』(Before the Socialists, Studies in Labour and Politics 1861 to 1881, London 1965)を出版し、その年から翌1966年にかけて、当時所属していたシェフィールド大学学外成人教育学部から、ウエップ研究のために休暇をとり、ロンドンで仕事をはじめたようである。パスフィールド財団理事のひとりバーナード・クリックが、シェフィールド大学政治学部長だった時期で、1966年9月、休暇の終わったロイドンは、クリックの政治学部に移る。そしてその年の冬の休暇中に、L.S.E.に保管されていたウエップ文書が、ロイドンとクリックに伴われてシェフィールドに移った。ロイドンのウエップ伝執筆がはじまる。

「形成期」のウエップ夫妻研究が、ロイドンの『社会主義者以前』の主要なテーマを継承し、発展させるものになったのは、上記の事情からみて自然なことだった。『社会主義者以前』は、進歩と秩序を調和させようとした「労働運動の知識人」ポジティヴィスト(実証主義者)たちにかんする一章で終わっている。ウエップ文書がシェフィールドに移ってから六年の歳月がたち、1973年春には、半年もすれば原稿を出版社に渡せるかもしれないという連絡が、ロイドンからL.S.E.のパスフィールド・マニユスクリプト保管責任者に送られる。しかしウエップ伝が日の目を見るのには、さらに四分の一世紀待たなければならなかった。その間の事情を詮索するのが本稿の目的ではない。ひとつだけ指摘したいことは、ウエップ伝を始めた数年後にロイドンが、友人のエドワード(E.P.)・タムスの依頼で、彼の後任としてウォーリック大学に移ったこと、そしてそれが『株式会社ウォーリック大学』(タムスン編)の告発にみられる大学紛争の最中だったことである。ロイドンがウォーリック大学教授、研究所所長として新しい

責任を引き受けたことは、それだけウエップ伝の遅延を意味したことは確かである。

ロイドンのウエップ伝はシドニーの生い立ち、専門職業人としての彼の自己形成の叙述からはじまる。シドニーは教育熱心な下層中流階級の出身、ロンドンの下町レスタースクエアの美容師の家に生まれる。彼の出生年1859年には、ダーウイン『種の起原』、マルクス『経済学批判』、J.S. ミル『自由論』、それにサミュエル・スマイルズの『セルフヘルプ』が出版され、地上に顔を出したばかりの若木シドニーをとりまく森の奥深さが最初から伝わってくる。ロンドンそのものがシドニーにとって「最高の学校」とされるが、ちかくの私立学校で学び、さらにスイス、ドイツで勉強をつづける機会をあたえられた。帰国後、植民地関係の証券仲買人のところで書記として働きながら、新しいステータス「専門職業人」(the professional man)の登竜門ともいえる厳格な試験制度に挑戦する。「人類の歴史上」シドニーほど優秀な受験生はまずいなかっただろう、といわれる。読書のスピードは異常なほど早く、記憶力は抜群、論理構成は確実、文体は明晰で無駄がない。シティ・オヴ・ロンドン・カレッジから二年間に二十もの教育関係の賞を獲得し、パークベック文学科学研究所では一年間に十一の認定証を得、次々と試験にパスして文官制度を昇って行く。1881年には「ほとんど信じがたいほどの高得点」で植民省に入った。

1879年には進歩的な論客の集団「懐疑家協会」Zetetical Societyに加わり、そこでおこなった報告では、J.S. ミルを思わせるような功利主義精神の危機を分析し、将来の世界の創造について楽観的な実証主義を志向する。この協会でシドニーはバーナード・ショウに出会い、「型破りの逆説と堅固な常識」の結合が生まれた。シ

ヨウははやくマルクスに傾倒し、はやくマルクスを捨てるが、ウエップは労働価値論を倫理的考察の支柱におく一方、限界効用理論を価額論、流通分析の基本におき、同時に稀少な生産要素にたいする報酬として特別な能力にたいするレントというかたちで専門職業人の経済的機能と報酬を説明した。

1885年3月シドニーはフェビアン協会会員に選出され、翌年執行部に加わる。80年代中葉、失業者の急増が社会不安をまねき、マルクス主義者の社会民主連合は失業者デモで注目を浴び、連合と袂を分かったウィリアム・モリスの社会主義者同盟はアナーキズムに傾斜した。1887年はフェビアン協会にとって決定的な年だった。その年のウエップの小冊子(Tract no.5)『社会主義者のための諸事実』は版をかさね、国民生産物の三分の二が土地と資本と能力それぞれのレントの受領者にわたるという不平等が貧困と困窮の原因であるという持論を展開し、統計をもちいてこれを補強した。同じ年に採択された協会入会条件、『基本条項』(Basis)は、フェビアン協会が社会主義者でもって構成されることを宣言し、土地の私的所有の消滅とコミュニティによる産業資本の管理運営を提唱した。シドニーは1889年の『フェビアン社会主義論集』のなかで「社会主義の歴史的基礎」を執筆し、それが『論集』全体に「横溢するシドニー・ウエップ精神」(モリスの言葉)の核を提供する。シドニーは、「旧秩序から新秩序への漸進的進化」を力説し、ユートピア社会主義や革命的社会主義(マルクス主義をふくむ)と決別する。産業革命は労働者をこの国の異邦人にしたが、政治の進化は急速にその労働者をこの国の支配者に行っている。個人主義は克服されつつあり、資本家は統制され、共同体によって取って代わられつつあり、あたらしい社会的統合が始まろうとしている。『論集』とともに、フ

ェビアン主義は「イングランド独特の社会主義」として登場する。その指導者と支持者はプロレタリアートではなく専門職業人であり、社会主義は階級闘争の結果としてではなく、高まりゆく制度的関心の結果として現実のものになりつつある、という。1820年代の哲学的急進主義(ベンサム主義)、60、70年代の実証主義にさかのぼる伝統の継承者としてフェビアン主義の位置づけが行われる。ベンサム主義者は自由な市場経済と啓蒙された利己心を信じ、実証主義者は資本家の教導を説いた。フェビアン社会主義者は、計画および道徳的判断を法令によって実施しようとした。

シドニー・ウエップとビアトリス・ポターのそれぞれの家柄や育った環境は対照的だった。「大資本家の八番目の娘」ビアトリス・ポターは、1858年1月2日グロスターに近いスタンディッシュ邸で生まれた。長じて彼女はロンドン・イーストエンドで家賃集金員、慈善事業家、社会観察者として働くことを楽しんだ。この時代のビクトリア朝イングランドを特徴づける「(恵まれた地位の)輝かしい未婚女性」(gilded spinster)の台頭である。実証主義を完成させたといわれるハーバート・スペンサーが彼女のもっとも近い友人かつ教師だった。スペンサーの『社会静学』はイギリスの急進的中流階級にとってマルクス／エンゲルスの『共産党宣言』に匹敵するものだった。生物の進化は特異性と複雑性を増大させ、人間社会における機能的適合は略奪的能力よりも協調的能力を発展させる。このようなスペンサーの影響のもとにビアトリスも、古きキリスト教の教義から「調和と進歩」の教義に改宗した。彼女が参加した慈善事業そのものが「専門的職業」になろうとしていた。労働者居住地区での経験から下層階級のための公共事業を批判するビアトリスの雑誌記事が、グラッドストーン内閣の地方自治庁長官ジョウ

ゼフ・チェンバレンの関心をひく。やがて新帝国主義の使徒となる大政治家チェンバレンにビアトリスは思いを寄せた。そのころ彼女はチャールズ・ブースの統計調査団に加わる。

イーストエンドの問題は、雇用制度や経営方法よりも人間の精神的肉体的欠陥にあるという彼女の確信は、苦汗工場での経験で修正された。1889年夏のロンドン港湾労働者のストライキにおける「労働者の団結」は彼女にとって「思いがけないこと」であり、労働世界全体に関心をもつようになる。そして1890年1月、ビアトリスははじめてシドニーに会う。

ここでロイドンは、ビアトリスの「引き裂かれた、ないし分裂した自己」の心理学的検証をおこなう。行動する調査の人ビアトリスの背後には沈思する批判の人ビアトリスがいた。しかも分裂した自己は、無私の、内面をもたない男、集団のなかで他人のために生きることのできる人を必要とした。ついでシドニーの性格分析に移る。彼の自己否定はビアトリスの場合よりも深刻であり、「内面」をもつことをやめ、公的な顔と私的な顔との区別を消し去る。そこから一種不可解な単純さが生じ、妥協不可能な部分のをこしながら、より大きな影響力のために個性や個人の影響力を捨て去る「レーニンのような性分」、 「独特の単純さと清廉さ」や「冷酷で計算づくの複雑な政治戦略」をもつようになる。「かれは究極のパートナーシップのなかで自分を消し去るために彼女が必要だったし、彼女は自分自身の拡張としての彼を必要とした」。互いに補完しあう弁証法的関係ともいえよう。この関係は、労働の世界の動的で組織的な三者構成（協同組合、労働組合、社会主義ないし労働党）の発見にいたる。「ふたりが一緒になれば、世界を動かすことができる」とシドニーはビアトリスに書いた。ビアトリスは「彼がせがむので」フェビアン協会に加入する。1891年シドニ

ーは植民省を去り（以後文筆業に専念）、92年ロンドン州議会の進歩党議員に選出され、翌年1月ビアトリスの父が死亡し、同92年7月ふたりは結婚する。

ロンドン州議会選挙で浮上した浸透か独立かという社会主義政党の基本戦略上の問題は先送りされ、十分議論されるに至っていない。

ウエップ夫妻パートナーシップの初期の成果、1894年の『労働組合運動史』（The History of Trade Unionism）ならびに1897年の『産業民主制論』（ないし『産業民主主義』（Industrial Democracy, 2 vols.））は、今日にいたるまでこの分野における最大の業績である。この研究を通じて夫妻は社会主義への移行にかんする通説に挑戦し、部分的な労働組合意識が自然発生的に社会主義的階級意識に移行することはないと考えた。彼らは新しい政治経済学を生み出さず、その労働運動理論は過度に制度的だったかもしれないが、夫妻は組織労働者が世界を変革することを望み期待したからこそ、組織制度の歴史を書いたのだとあって、著者は全面的に夫妻を擁護する。彼らの『産業民主制論』ないし『産業民主主義』は「かつてイングランド労働組合について書かれた最も独創的で包括的な書物」である。産業民主主義における自由は、消極的自由ではなく、積極的自由であり、組織化に敵対するものではなく、ある特定の形態の組織化に依存するものだった。そうした組織化では、協同組合が普及し、公共サービスの市営化・国営化が進むにつれて、労働組合は専門職業団体になる。専門職業人ウエップの描いたユートピアと言えなくもない。だがレーニンもベルンシュタインも、労働組合と政治組織との関係についてウエップの議論を援用ないし利用した。レーニンは、職業的革命家からなる統制のとれた政党の役割についてウエップの議論を援用し、他方ベルンシュタインの修正主義に

ついていえば、「近代資本主義の枠内では労働組合意識で十分であり」、「運動がすべて」だという議論は、もともとシドニーのものだった。

ロイドンのウエップ伝は、「日和見主義」にかんする二つの章でおわっている。ひとつは「英雄的」、今ひとつは「汚れた」と形容されている。前者はロンドン州議会でシドニーが、とくに教育制度の分野で行った貢献にかかわるもの、後者は「社会帝国主義者」としてウエップ夫妻が果たした役割にふれる。シドニーは技術教育委員会の議長として教育機会の拡大につとめる。奨学金や助成金などの学力捕捉機構が拡充される。しかしその恩恵に浴したのは労働者階級よりもむしろ小ブルジョアジーだった。教育法の制定にあたり彼らは保守党と提携した。フェビアンイズム浸透の問題である。

その間、フェビアン協会の熱烈な支持者H.H.ハチンスンが協会の諸目的を推進するためにのこした遺産の大きな部分を主要な財源として、1895年にロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）（London School of Economics and Political Science）が創設されるが、これもウエップ夫妻のイニシャティヴに負うところが大きい。しかし初代学長をはじめ大半の教員は非社会主義者であるか積極的に社会主義に反対した。そして約二十年間LSEの理事は帝国主義の共鳴者だった。刺激的な教育研究の場にはなったが、創立の経緯からすればLSEは背信を意識せざるを得なかった。さらにウエップの影響のもとに、従来主に学位授与の機関だったロンドン大学が教育を主とする総合大学に編成替えする。

ウエップは貴族、ブルジョアジーの文化につぐ第三の労働の文化の眞の提唱者だったとロイドンはいう。それは、労働の年代記を受け入れ、民主的行政の検討を通じて民主主義の到来に備

える文化であり、その発見はウエップ夫妻の「永遠の功績」だった。だが第三文化のむつかしさがすぐに露呈する。新しいプロフェッショナルリズムはただ富のみを補強し、すべての教育機関を限定的なものにするのに貢献した。しかも「労働運動もしくは社会主義という財産がないために、ウエップ夫妻は帝国主義に頼った」。労働党が労働代表委員会として1900年に結成されたとき、フェビアン協会は加盟したが、ウエップ夫妻はこれを無視した。

「労働党が誕生した、まさにそのときに夫妻は労働者の政治からの逃亡を図っていた」。かれらは、社会主義の未来は帝国主義の運動のなかにあると信じた。とくにビアトリスは「凶暴性を象徴する醜い顎と低い額をしたSDF（社民連）系」というような、人種的偏見と階級的イデオロギー的蔑視を示す言葉をつかいさえた。ポア戦争で夫妻は、フェビアン協会の多数派とおなじく戦争に賛成し、ビアトリスはチェンバレンと彼の帝国主義に全幅の信頼をよせた。シドニーは、物質的・道徳的最低限ミニマムの創出が、帝国にふさわしい民族を育てるために不可欠だという社会帝国主義を提唱した。1902年にはウエップ夫妻主導のもとに効率懇話会（Co-efficients）が設立され、帝国の効率に役立つ目標、政策、手段を議論した。そこでは効率に優勢学的・軍事的な配慮さえ示された。夫妻は、「はっきりと帝国主義に移行した」。しかし彼らが区分したのは「成年民族」と「未成年民族」のあいだであり、家父長的、日和見的だが、人種差別ではなく、ヒトラー的偏見に譲歩するものではない、とロイドンはいう。「汚れた日和見主義」だということによって彼らを免罪にする。

以下は評者の補足だが、1911年、韓国併合直後、夫妻は日本を訪れ、帰途ソウルへ行き、そのあと寄った北京からビアトリスが、韓国の印

象をバーナード・ショウに書き送っている。「千二百万のコリアンは、不潔で、墮落した、気難しい、宗教と無縁な、野蛮人です。彼らは、きわめて不格好な、汚い、白色の衣服をきて、だらしなくうろついています。ついに日本人は、この種族を併合しましたが、それは世界の利益にかなうことです。」(Norman Mackenzie, ed., *The Letters of Sidney and Beatrice Webb*, vol.2, p.377) ロイドンのウエップ伝の「後日譚」は多くを語らず、彼らの日本訪問にもふれていない。他方、ウエップ伝を社会帝国主義者ウエップでおわらせることは残念である。ビアトリスが活躍する救貧法委員会少数派報告の作成やキャンペーン、ヨーロッパ大戦とともに始まる労働党および社会主義への接近、ソビエト連邦訪問など、彼らの全生涯のなかで、二十世紀初頭に帝国主義を受け入れたことの意味を検討すべきであろう。

本書のなかで、いちどだけロイドンは「続巻」にふれているが、それを完成させることなく2002年75歳で亡くなった。さぞ無念だったことと思われる。ウエップ夫妻は歴史研究の新分野を開拓する以上の自負をもっていた。彼らの時代の『国富論』を書くこと、新しい政治経済学を創造することだった。これに彼らは成功しなかったが、それは、とロイドンは言う、「夫妻の野心が、大胆な行動の先をゆき、おそらくは彼らにあたえられた時間やチャンスをこえたものだったからである。」ロイドンにとってウエップ伝を書くことは、ウエップが『国富論』を

書くようなことだったかもしれない。

ロイドンのウエップ伝の続編ないし第二巻については、シェフィールドやウォリックの友人達によって編纂の努力がつづけられている。だがそのための原稿をロイドンは残していない。戦時緊急労働者委員会など、一二のテーマについては既発表の独立の論文があり、ソビエト共産主義についてかなり早い時期に書かれた原稿がみつまっている。ジョン・ハルステッド氏ら友人達の御苦勞はたいへんなものだと思われるが、成功を祈りたい。

ロイドンのウエップ伝は、彼の言う木と森の両方を丹念にえがき、性格描写や心理描写も絶妙で、エピソードにも事欠かず、読み物としても第一級の伝記である。さらに彼自身の研究をふくむ半世紀間の労働史研究の成果を織り交ぜ、しかも驚くほど豊かな見識と、そして鋭く、磨ぎすまされた批判精神をもって書かれたイギリス社会主義の歴史書である。それだけに訳者、大前眞さんが翻訳に苦勞なされたものにご同情申し上げる。いつの日か第二巻が完成し、全訳が可能になるとき、第一巻の訳文についても、ロイドンの原文に劣らない明晰さをしめしていただけるものと期待している。

(ロイドン・ハリスン著 (大前眞訳)『ウエップ夫妻の生涯と時代 1858-1905年：生誕から協同事業の形成まで』ミネルヴァ書房、2005年2月、xvi+367+57頁、6500円+税)

(つづき・ちゅうしち 一橋大学名誉教授)